

2009 年度

産 業 能 率 大 学

教育開発研究所

年報 《概要版》



産業能率大学

□ 目 次 □

《概要版》の刊行にあたって	2
I. 本学の特色ある教育とその評価	
1. 「アーティストプロモーション」(経営学部)	3
2. 「インターンシップ I」(情報マネジメント学部)	13
II. 授業評価・受講態度調査報告	
1. 学生による授業評価の結果報告	20
III. 授業改善・FD活動の報告	
1. 授業改善の取組み	26
2. FD活動の報告	31
おわりに	37

《概要版》の刊行にあたって

本学は、1979年の創立以来、「建学の精神のもと、マネジメントの思想と理念をきわめ、これを実践の場に移しうる能力と豊かな人間性を兼ね備えた人材を育成すること」を目的として、学生教育に取り組んできました。2001年には、「教育中心大学としてのあり方を確立し、教育の質的向上を目指す」というビジョンを掲げて、大学改革の取組みを開始しました。その取組みの一つとして、FD（ファカルティ・ディベロップメント）活動も積極的に展開しており、2002年度にFD委員会を設置し、1995年度から一部で開始していた「学生による授業評価」を全面的に見直し、全学的に実施するようになりました。その結果は、2006年度より年次報告書『FDレポート』の形で刊行し公表してきました。

本学では、このようにFD活動や教育の質的向上の取組みを続けてきましたが、社会における教育力の向上や教育の質の保証に対する要請が強まってきたこともあり、2008年4月に教育開発研究所が設置されました。同研究所は、設置されてから教育の質的向上に関する一連の取組みを組織的に推進して、より一層の教育、FDの実質化を目指すための活動を行ってきました。その活動成果を公表するものとして、「教育開発研究所年報」を発刊しております。2008年版に続き、この度、「2009年度教育開発研究所年報」が発刊されました。この《概要版》は、年報の中から主たるものを抜粋し報告するものです。今回は、従来からの「学生による授業評価」アンケートの結果と、教員によるFD研修会や授業改善の取組みに加えて、「本学の特色ある教育とその評価」の章を設けました。経営学部と情報マネジメント学部それぞれから、特色ある教育を1つずつ採り上げ、その内容を紹介するとともに、学生アンケートを用いてその効果を分析・報告するものです。本学のFD活動や教育開発研究所の活動の一端をご覧いただけたらと思います。なお、詳細なものは「教育開発研究所年報」に記載されておりますので、そちらもご覧いただけたら幸いです。

2010年7月 教育開発研究所 所長 城戸康彰

I. 本学の特色ある教育とその評価

本学は、1979年の創立以来、建学の精神で、「マネジメントの思想と理念をきわめ、これを実践の場に移しうる能力と豊かな人間性を備えた人材を育成すること」を謳い、教育を行ってきた。その中で、この建学の精神を実現するべく授業が開発され、実践されてきた。本章では、こういった背景を持つ本学の特色ある教育を紹介する。

経営学部、情報マネジメント学部から、それぞれ1つずつ特色ある授業教育科目を取り上げている。内容とともに、どのような効果をあげているかも重要な評価対象点である。ここでは、各授業の教育成果も合わせて報告する。

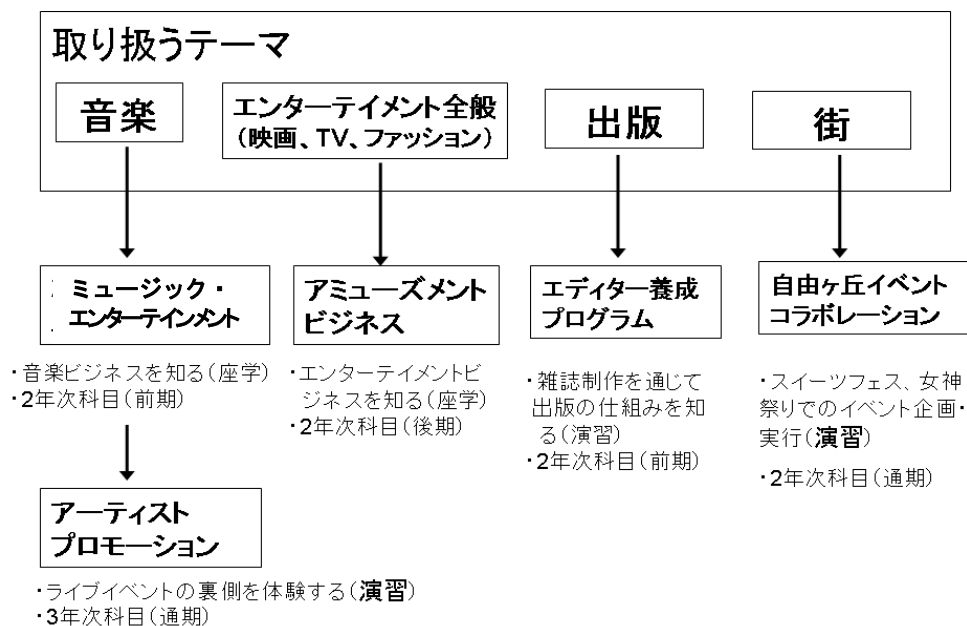
1. アーティストプロモーション（経営学部）

報告者：松尾 尚（経営学部教授）

「アーティストプロモーション」は、履修学生が有料ライブイベントを企画・実行し、そのイベントの成否と、個人の貢献度で成績評価する実践型科目である。本稿は、2009年度本科目履修生に対するアンケート調査を基に、授業・実習に対する取り組み姿勢、満足度、科目運営上の成果・課題を明らかにすることを目的とする。

1.1 科目概要

(1) 本科目の位置づけ



図表 I-1 経営学部「都市型ビジネス科目群」の構成

「アーティストプロモーション」は、実務教育科目の都市型ビジネス科目群に属する3・4年次配当の2単位通年科目である。2007年度に、「インターンシップⅡ」の中でパイロット運営し、2008年度より正式科目として開講した。担当教員は、兼任教員の飯田俊氏、専任教員2名（田中彰夫、松尾尚）の計3名である。

本科目は、都市型ビジネス科目群の「ミュージック・エンターテインメント」及び「アミューズメント・ビジネス」で学んだ知識をより実践的に活かし、ライブイベントを実際に行き、いかに利益を上げるかを学ぶ体験・体感型授業である。

(2) 本科目のねらい

本科目の目的は以下の3点である。

- 1) 実践型授業の提供によるビジネス感覚の醸成、及び学生授業満足度向上を図る
- 2) 音楽という身近な業界のビジネスを通じて、経営学一般に対する興味を持たせる
- 3) ユニークで、かつ実践的な授業のモデルケースを確立する

この科目の最終ゴールは、11月に履修学生主催のコンサートを実施することである。開催までのプロセスにおいて、全体スケジュール企画、出演交渉、場所決め、予算表作成、プロモーション、当日の進行、予算管理に至るまでを実践を通じて学び、この一連の流れを通し、ビジネス感覚、チームで行動する力、自ら前に進む力を向上させることを目的とする。また、学生にとって身近な音楽を出発点として、経営学一般について、更なる興味を深めることも効果として期待する。

授業の約半分は、学外での現場体験学習となり、講義＋課外実習で計14回のカリキュラムになる。2009年度の場合、以下の課外実習を実施した。

5月 武蔵野市主催の吉祥寺音楽祭にて、ライブ裏方実習

10月 プロモーション実習（ちらしの作成と配布）

11月 学生主催のライブの開催と運営

11月のライブコンサートは、横浜駅西口のライブハウス（サムズアップ）にて行われ、ほぼ満員の130名を動員して、成功のうちに終わった。また、このコンサートについては朝日新聞に取り上げていただけるなど、本学のイメージ向上にも寄与したと考える。

1.2 授業アンケートの概要

2009 年度本科目の履修生に対して、授業最終週に、授業内容に関するアンケートを実施した。ここでは、その結果について報告する。履修学生 23 名を対象に、18 名分の回答を得た。質問内容は次表にある 7 つのテーマに分かれる。

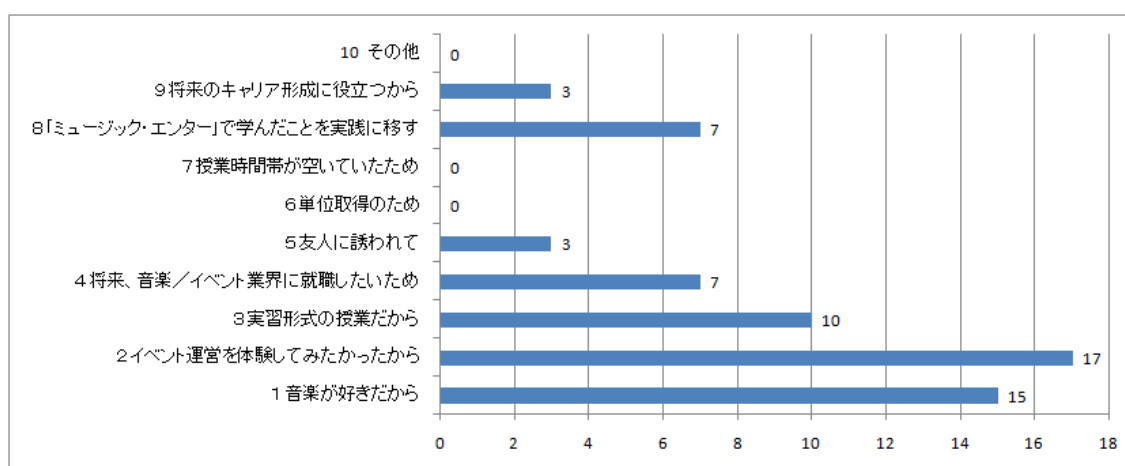
質問テーマ	項目
履修理由	履修理由について、9 つの選択肢から複数選択
満足度（定量）	授業満足度について、定量評価
満足度（記述）	何に満足（不満足）であったかを自由記述
学生自身の参画度	授業への自身の関わり方について、5 つの選択肢から自己評価 （能動的参加－受動的参加－何もしていない）
受講しての感想	授業について 4 問、課外実習について 4 問用意し、定量評価
期待していたことを得ることができたか	授業を通じて、どんな力（例：企画立案力等）が身についたか
授業への提案（記述）	来年度以降に向けての提案を自由記述

図表 I-2 授業アンケートの内容

1.3 アンケートの結果分析

(1) 本科目を履修した理由

本科目を履修した理由について、9 つの選択肢を用意し複数選択で回答を得た（図表 I-3 参照）。ライブコンサートの実際の運営という、従来の大学授業と異なる授業に対して、単に授業時間割上の都合や単位取得のためといった受動的な理由で履修したのか、それとも、何らかの能動的な意志を持って履修したかを明確にすることを目的とする。



図表 I-3 授業を履修した理由（回答数：18）

「単位取得のため (0/18)」「授業時間帯が空いていたため(0/18)」「友人に誘われたため (3/18)」といった受動的な履修理由の学生は、ほとんどいないことが分かる。

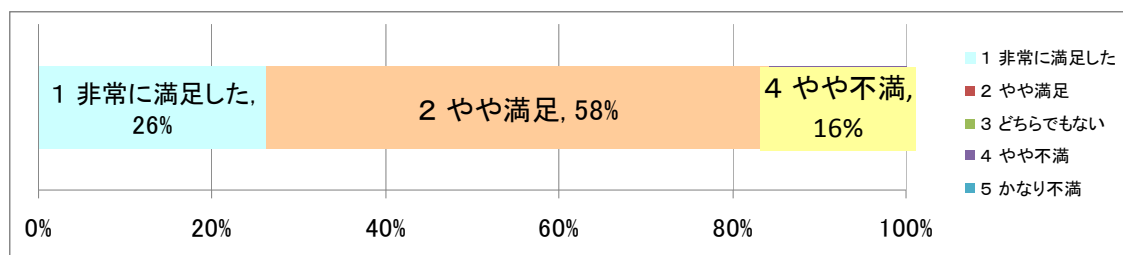
一方で、もっとも多くの方が選択していたのが、「イベント運営を体験してみたかったから (17/18)」であり、続いて、「音楽が好きだから (15/18)」、そして、「実習形式の授業だから (10/18)」といった結果となり、学生時代に何かチャレンジングなことをやってみたいといった能動的な意志が伺える。

また、「将来、音楽／イベント業界に就職したいため (7/18)」を理由として挙げた学生は全体の 40%弱を占め、音楽業界への就職を期待して履修した学生も一定数、存在することがわかる。

(2) 受講してみたの現在の満足度

図表 I-4 は、実際受講してみたの満足度を、「非常に満足した」から「かなり不満」までの 5 段階で評価したものである。

また、その理由についても、自由記述形式で記述を求めた。



図表 I-4 受講してみたの現在の感想 (回答数: 18)

「非常に満足した (26%)」に「やや満足した (58%)」を加えた肯定層は全体の 8 割強を占めることから、当科目の満足度が非常に高いことが伺える。満足の理由は大きく分けて 2 つあり、1 つは、チームで目的を成し遂げることの達成感、そしてもう 1 つは、科目のユニークさに対する評価である。

次に満足度の高い学生の意見を、すべて原文通り記載する。

満足度の高い学生(1)：個人の達成感に関するコメント

自分がやりたかった事が、そのまま授業で表せたこと。達成感があり、とても充実した。みんなで、一つの事を成し遂げられて、本当に楽しかったです。アーティストの方、学生、先生、みんなと仲よくイベントを成功できた事が一番の満足！！参加して良かったです。

みんなで、何か一つの事をやる(ライブ)ことで団結力が生まれ、思い出に残る授業となった。また、メジャーではない人たちと触れる機会があり、嬉しかった。

実際に外に出てプロモーション活動にでるというのも実践的で身になる授業でした。ライブが成功できた事。また、このライブを成功させるために色んな人から協力してもらったり、関

わりを持つことができて良かった。
学生主体でイベントを考えられて、よかった。

満足度の高い学生(2)：授業内容について

ユニークで面白い授業に参加でき、良い経験をした。
授業でこのような実践的な内容が履修できるのは、珍しいし、良い機会になった。
この大学にあまりない授業であり、貴重な体験ができた。自分から行動する機会が身についた。仲間を大切にする心が成長した。アーティストさんと直接関われたことは本当に良かったと思う。
大学の授業メンバーだけでなくアーティストの方たちとも親交を深めることができ、“授業”という枠組みを越えた貴重な体験ができました。

一方、「やや不満」と感じている学生も 16%存在する。その不満の理由は、大きく分けて 2 つある。1 つは、授業内容への期待と実際とのギャップ、そして、2 つ目は、授業内容は満足だが、授業への参画度についての自分自身への不満である。

以下に満足度の低い学生の意見を、すべて記述する。

不満足の原因(1)：期待と実際のギャップ

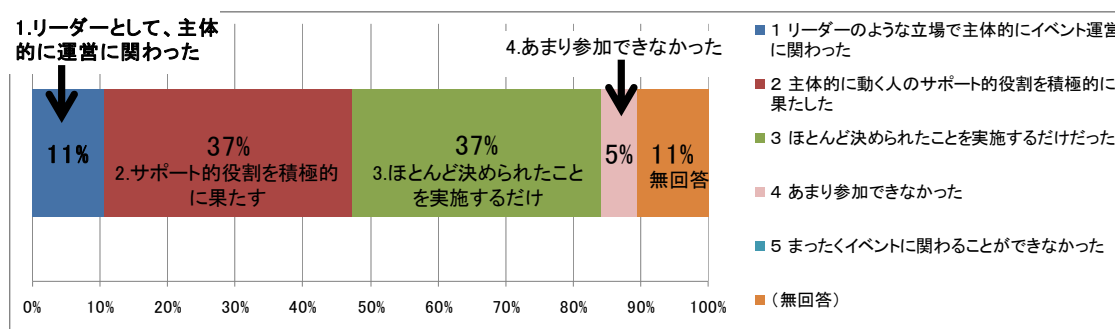
演劇などを経験したかった。思っていた感じと少し違いがあった。
思っていたのと全く違って、ほとんど外部講師にルールを決められての授業だった。
シラバスに書いてあった内容と授業が違ったから。

不満足の原因(2)：自分自身への不満

授業内容には満足でしたが結果としてはもっとがんばれたと思っています。
なんとか LIVE が形になった所は満足だが、もっと自分はやれたと思う。
計画を行動に移せなかったこと。無事に成功することができた。

1.4 学生自身の授業への参画度

学生個々の実習への参画度合いについて、どのような立場で、どの程度参加したかについて、5つの選択肢を用意し、択一で回答を得た（図表 I-5 参照）。



図表 I-5 学生個々のイベント運営への関与（有効回答：19）

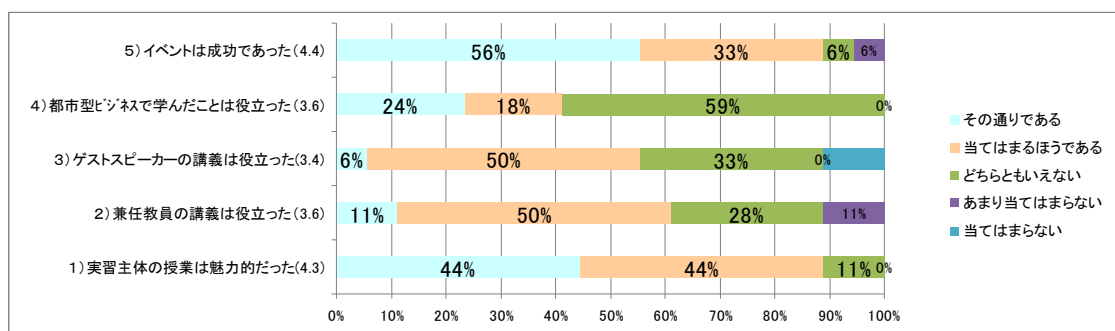
積極的な関与については、「1. リーダーの立場で主体的に運営に加わった」と「2. 主体的に働く人のサポート的な役割を積極的に果たした」の2つの選択肢を用意したが、この2項目計で58%（11/19）となり、約半数は、イベントの開催について、能動的な参加を果たすことができたとして自己評価している。

一方、「3. ほとんど決められたことを実施するだけ」という受動的な関わりが全体の37%（7/19）を占める結果となり、主体性を持つ者と持たない者のばらつきがあることが分かる。

1.5 授業を振り返っての感想

ここでは、1) 本科目の授業内容がどのように役立ったかと、2) 本科目での経験が今後の学修へどのように活用できるかの2つの側面から分析する。

(1) 授業・実習全般について



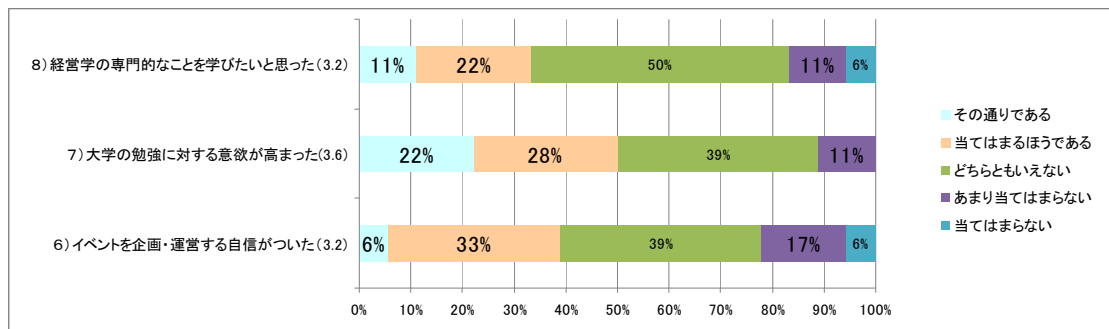
図表 I-6 授業を振り返っての反省（授業・実習全般）（有効回答：18）

図表 I-6 は、授業内容の評価を 5 段階に分け、択一で聞いたものである。なお、図表 I-6 の質問項目の後の () 内の数字は、評価を 5 点満点としたときの単純平均値を示す。

学生の評価としてもっとも高かったのが、「1) 実習主体の授業は魅力的であった」と、「5) イベントは成功であった」の 2 点である。「満員のコンサートを開く」という達成目標のわかりやすさと、自分達で企画から運営までを担当するといった行動力が試される授業であったことが、学生に評価された要因であると考えられる。一方、兼任教員とゲストスピーカー（コンサートビジネスの現場関係者）の講義は、相対的に評価が低く、実習に講義（座学）をどのように組み込んでいくか、今後の課題と認識している。

(2) 今後の学修への反映

今後の学修への反映、つまり、この授業で学んだ事柄が、今後の学修生活にどのように活用できるかを確認したのが、以下の 3 つの設問である（図表 I-7 参照）。

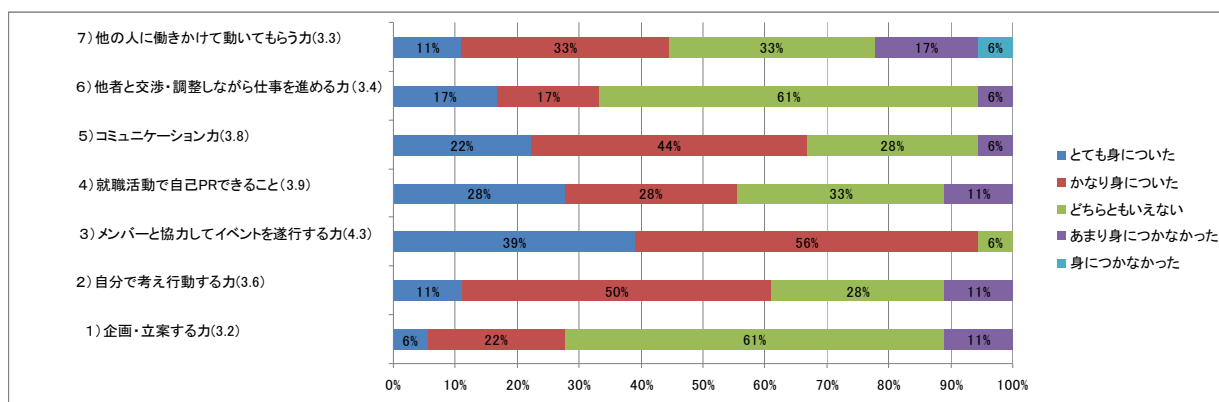


図表 I-7 授業を振り返っての反省（今後の学習に向けて）（有効回答：18）

いずれの設問においても、「どちらともいえない」がもっとも多数を占めているが、一方で、この授業を受講したことにより、「大学の勉強に対する意欲が高まった」と肯定的に考えている学生が 50%、「経営学の専門的なことを学びたいと思った」についても、33%の学生が肯定的な意見を持ち、経営学を学ぶことへの新たな意欲を見出していることがわかる。

この授業の目的の 1 つとして、音楽という取り組みやすい業界におけるビジネス体験を通じて、経営学一般への興味を深めることがあった。経営学各論（音楽ビジネス）の勉強を通じて、総論（経営学全般）へのモチベーションを向上させる学生の比率を向上できるよう、授業改善に取り組みたい。

1.6 授業で伸ばすことができた力



図表 I-8 授業で得たもの（有効回答：18）

この授業で身についたと感じる知識・スキル・能力等について、7つの設問を用意し、「とても身についた」から「身につかなかった」までの5つの選択肢から当てはまるもの1つを選択した結果が図表 I-8 である。

履修者が身についたと感じているのが、「3）メンバーと協力してイベントを遂行する力」である。「とても身についた」に「かなり身についた」を加えた肯定層が全体の 94%（17/18）を占め、この授業がチーム学習力向上に役立ったとほとんどの学生が認識していることがわかる。

また、「4）就職活動で自己PRできること」については肯定層が 61%（11/18）を占めており、実践型授業での体験を有効な自己表現材料として認識している。

一方、「1）企画・立案する力」については肯定層が 5/18、「6）他者と交渉・調整しながら仕事を進める力」については 6/18 のみが授業で得ることができたと認識しており、履修学生が主体的に企画し、その企画を通すための他者（アーティスト・ライブハウス等の外部との交渉及び、内部学生同士の協調）とのやり取りについては、自己評価が低い結果となった。

1.7 学生が考える授業の改善点（自由記述）

授業を振り返っての改善点について、自由記述で依頼したところ、回答者 18 名中、16 名の回答を得た。学生からの要望は、授業の計画性、学生の自主性の尊重、他履修学生との関係性の 3 点に分かれる。

(1) 計画性

計画性を指摘する意見については、全過程のスケジュールリングをしっかりとやってほしいとの意見が得られた。年間を通じて基本的な授業日は早期に固定し、それ以外の補講的授業については、進行状況を見ながら適時、開催していくとのやり方で運営していたが、今年度

からは、補講的授業を含め、なるべく固定スケジュールとして管理・運営していきたいと考える。

計画性に関する意見

とても楽しい授業で、またやりたいと思えるほどだけど、7～9月くらいは、何していいか判らなかつたから、もっと、イベントとかあったりしたら楽しいかも。どうせやるなら、いろんなことにチャレンジできる授業にしていって欲しいです。
もう少し計画を具体的にして実践すれば、もっといいライブになると思う。そのために、アーティストとの交流がもっとあったらいいかなと思った。
授業がある／ない日のスケジュールはもっと明確にして進めてほしかったです。
授業のある日をもう少し早めに教えて欲しかったです。
授業の始めの方は、イベントがどういうものなのか理解しきれていないところがありました。来年以降は、今年のイベントの映像を見たり、会場が決まったら足を運んでみるなどして、もっと始めのうちに具体的な内容を知ることができれば、早くから全員が協力して、もっと、良いイベントになると思いました。
スケジュールの調整をもっとしっかりして欲しかった。今の音楽業界についてや、イベントの運営についてもっと詳しくやってほしかった。

(2) 学生の自主性の尊重

アーティストの選定から企画・運営に至るまでのプロセスにおいて、学生の自由裁量部分を増やしてほしいとの意見が主である。教員サイドとしては、イベント企画を経験したことがない履修者が多いことと、スケジュールの都合上、ある程度、教員が補助していく必要があると考えていたが、これが学生側の不満として挙げられた結果となった。次年度からは、アーティストの選択を学生に任ずことをはじめとして、改善を図りたい。

学生の自主性の尊重についての意見

アーティストは毎日自分で全てを行っている人で、それに従ったり、先生方の言う形で進んでいたの、ほとんど自由はなかった。
もう少し学生主体にしたほうが良い。
アーティストの方々を選択する時、思っていたのとは違っていたので、本当に学生が見つけた、あるいはプロモーションしたいと思うアーティストを自分達で交渉する所から始めたらもっと勉強になると思った。
もっと自分たちの好きなアーティストを選べるようにしたほうがいい。

(3) 他履修者・大学との関係性

約 20 名の学生が履修しているが、個々のモチベーション、スキル等にばらつきがあり、それが学生の不満として表れた結果となった。教員側でモチベーションが低い学生とコミュニケーションを取ることも重要だが、学生側でも、いかにやる気のない学生をその気にさせるかといった点を学生同士の自助努力で克服させるよう指導していきたい。

他学生との関係性に関する意見

面接をする等、授業を受ける前にメンバーを厳選して欲しかった。モチベーションの有無は、チーム全体に影響するので。
もう少しグループで話し合う時間が欲しかったです。グループに分けるのはいいと思うが、イベントはグループ関係なく行うので、みんなで仲良くなれる時間があればいいと思った。
ある程度のルールが必要で、皆がはじめての体験なので、ルールに従って、各チームの色を出していく方が良いと思う。また、学総の人にも授業に参加してもらえると学内での活動がスムーズに。
アーティストさんごとにチーム分けをするのは、チームを超えたコミュニケーションがとりづらい。学校の授業なのに、大学がお金を出さないのはなぜか。

1.8 まとめ

本アンケートから明らかになった成果と課題についてサマリーする。

まず、成果は、以下の 3 点である。

- ・音楽という身近なフィールドを取り上げることによるビジネスへの興味の醸成
 - ・学生が主体となる実践型授業を提供することによる学生満足度向上
 - ・音楽ライブの成功というわかりやすい目標を共有することによるチーム学習力の向上
- 一方、課題として顕在化したのは、次の 2 点である。

第 1 に、学生の自主性をどこまで尊重していくかである。これについては、学生側に運営上の裁量を増やす方策であり、2010 年度からは、ライブイベントを従来の 1 回 (11 月) から、2 回 (7 月、11 月) に増やし、1 回目は教員がフォローしてイベントの運営手法を経験し、2 回目は、1 回目の経験を踏まえて、アーティスト選定からライブ運営までの一連のプロセスを、学生が主体となって行うよう改善を施す。

第 2 に、ライブイベント開催に対する満足感を学生に提供することがファーストステップとすれば、今後は、セカンドステップとして、そこから経営学全般への学修モチベーション向上にいかに関結びつけるかを検討したい。これについては、音楽という限定した特殊なビジネス分野ではあるが、その中で、コスト管理、売上分析、効果的なプロモーション、交渉力といったすべてのビジネスに共通な要素を強調する形で授業運営に改善を施していきたい。

2. 「インターンシップⅠ」(情報マネジメント学部)

報告者：鬼木 和子（情報マネジメント学部教授）

2.1 科目の特徴

本学の教育科目「インターンシップⅠ」は、創立者の「実践重視」の教育理念に基づき、1979年の開学以来、本学を代表する科目の1つとして、教育の質向上に貢献を続けている。以下、本節では、「インターンシップⅠ」の特徴、及び実施内容を概観するとともに、情報マネジメント学部で継続的に実施している「受講後のアンケート調査」の実施結果を報告する。

本学は、これまでインターンシップ授業に参加した約5000名の学生が延べ2000以上の事業所で就業体験を行ったという実績を持つ。各年の推移は図表Ⅰ-9に示す通りである。

年度	学年定員	履修者	実習先数
2000	687	49	36
2001	664	100	56
2002	641	107	56
2003	618	90	45
2004	595	110	54
2005	580	108	55
2006	580	104	60
2007	580	149	70
2008	580	175	77
2009	580	150	85

図表Ⅰ-9 「インターンシップⅠ」履修者数の推移(2000-2009年)

また、ここ数年では、インターンシップ参加者の学年定員に占める割合が3割近くにのぼり、全国の大学で第15位（首都圏では第2位）と上位に入っている（『大学ランキング2010』朝日新聞社）。この過程で培われた本科目の特徴は、次の2点に集約されよう。

①学生中心の学習環境の構築(教職員によるサポート体制の徹底、学生参加の評価活動)

②統合的学習の推進

(事前事後学習の充実、クラス合同実習報告会の開催、プログラムの産学連携)

まず、特徴の1つである「学生中心の学習環境構築」であるが、当然のこととして、学生各自の就業体験を充実させるには、各自の高い意欲と主体性がなければ実現できない。同時に、学生の身分であるとはいえ、実習先では一社会人として遇され、自らの責任で行動をとることが求められる。そこで、本科目では、責任ある社会の一員として学生を認め、学生自らが主体的に課題に取り組めるよう、担当の教職員は「支援者」の役割に徹し、様々な工夫

を行っている。その1つが、サポートサイトの設置である。このサイトによって、学生は自ら必要とする情報を得て、課題を理解する等、単に授業に関する情報を得るだけでなく、自らの探究を導くものと位置づけている。また、後述するが、学生によるプログラム評価の実施、及び結果の公開をすることにより、学生の意見が反映された科目改善が可能になる。こういった参画意識を高めることによって、社会の一員として実習に臨み、よりよい学習環境を自らが構築し、学習成果を上げるサイクルが定着するのが、この科目の特徴、つまりは、この科目に期待される効果であると言える。

次の「統合的学習の推進」については、本科目が夏期の実習だけで完結するものではないという点をあげることができる。実習先を決定する過程、実習先に提出するエントリーシートを作成、企業、あるいは事業所に関する研究報告、実習日誌の作成、そして、実習後の振り返り、実習報告会でのプレゼンテーションなど、インターンシップにかかわる活動は多岐にわたる。しかも、1つの活動が次の活動の資料となり、すべてが有機的に関連している。様々なスキルを統合し、プロダクションに繋げる学習過程はまさに「統合的学習」といえる。そして、それは実学志向のアカデミズムに求められる「学びの経験」に他ならないのである。

2.2 科目概要

(1) 科目の位置づけ

「インターンシップⅠ」は、本学のキャリアデザイン科目群にあり、経営学部、情報マネジメント学部とも、選択科目として、学期毎に定められた履修単位数の制限外で履修することができる。単位数は4単位の通年科目で、夏期の2週間（実働10日間）にわたる実習期間と前・後学期の事前・事後授業で構成される。対象学年は、両学部とも2、3年次である。前提科目は「ビジネスマナーⅠ（ビジネスマナー）」となっており、「インターンシップⅠ」と並行して履修することもできる。

本学のインターンシップは、開学当初は2年次の必修科目に位置づけられており、選択科目になった現在でも、履修者の大半は2年生である。企業主体で行っている就職連動型のインターンシップとは異なり、就業体験をいかに自身の大学生活やキャリア設計に役立てるかが学生にとって重要な課題となっている。

本学には、この他に、「インターンシップⅡ」が3、4年生を対象に開講されている。この科目は、「インターンシップⅠ」の実施内容をさらに発展させ、長期間にわたる実習を行い、企業・団体の一員として業務に参加する形態をとる。つまり、学生自身の卒業後の進路に、より密接にかかわる実習プログラムであり、学生は受け入れる企業の一員として実習に臨む姿勢が求められる。

(2) 実習目的

「インターンシップⅠ」の実習期間は実働 10 日間と、限られているが、今後社会において学生自身が依って立つ専門性について思いをめぐらせ、なんらかの手がかりをつかむことも不可能ではない貴重な体験学習となる。実習目的（本科目の達成目標）は、次の 3 つにまとめられる。

- ①在学中に企業や公共団体の仕事を体験し、今後、将来の進路を決定するにあたり、残りの学生生活をどのように有効に過ごしていくべきか、考える契機とする。
- ②大学の講義で学んだマネジメントや IT に関する知識が、実際の仕事の現場でどのように活かされているのかを確認するとともに、課題を見つけて、今後の学習テーマにつなげる。
- ③実習先の業務の一部を、責任をもって遂行することで、仕事の意義や厳しさを理解する契機とし、自らも社会の一員であることを自覚する。

その他に、科目の特徴に挙げたように、事前事後の授業で行う企業研究や実習成果についての口頭報告の活動を成功させる等、「就業体験」を素材に様々な学習スキルを動員し、統合的な学習経験を修めることも重要な目的といえる。また、同時に、プログラムの担い手として、主体的に責任を持って、各活動を成功させようと意識し、実行することも科目の目的としてあげることができる。

(3) 科目構成（プログラム）

この科目は、ガイダンス、事前授業、夏期実習、事後授業、そして合同発表会で構成されている。

①ガイダンス（4～6 月中旬：ガイダンス、事前説明、実習先選定）

初回ガイダンスに加え、実習に際しての留意点説明、実習先希望調査など、各学部とも合同クラスにて授業を行う。

②事前授業（～7 月末：計 3 回）

実習先が決定した後、10 名程度の少人数クラスに分かれ、担当教員¹が事前準備のサポートに当たる。学生は実習先企業、業界、事業内容を調べると同時に、各々実習に向けて必要な知識、スキルがあれば、事前学習を行う。また、実習先へ提出する身上書などの作成にもあたる。必要文書テンプレートは、サポートサイトからダウンロードできるようになっている。各自の文書管理にも役立つ仕組みである。

③夏期実習（～9 月中旬）

実習先が指定した期間（2 週間：実働 10 日）、さまざまな業種、職種の実習先に赴き、職場の一員として、また、社会人として、任務を全うする。この間、実習日誌の記入を行う。また、担当教員が実習先を訪問し、職務状況の確認、学生への助言、励まし等を行う。

¹ 2009 年度については経営学部履修者約 100 名に対し担当教員は 10 名、情報マネジメント学部履修者約 60 名に対し担当教員は 6 名であった。

④事後授業（9 月末～10 月中旬：計 4 回）

後学期開始後、事前授業と同じクラスに分かれ、それぞれの就業体験を振り返り、成果、及び反省点をまとめる。それに基づき、各自実習報告を作成し、クラスで相互に発表し、体験の共有化を図る。最終成果物として実習報告書をまとめる。

⑤合同発表会（11 月上旬：計 3 回）

合同クラスにて、各クラスの代表が成果発表を行う。他の学生の体験に触れ、異なる分野の実習内容を知るとともに、効果的なプレゼンテーションの方法を相互に学ぶ機会を得る。

(4)実習先

インターンシップ授業の実習先は、教員からの紹介が最も多く、次に本学卒業生の就職先として実績のある企業、提携している業界団体企業、そして、本学と取引関係にある企業の順になっている。業種は、金融、サービス、販売、情報、アパレル、自治体など多岐にわたっている。

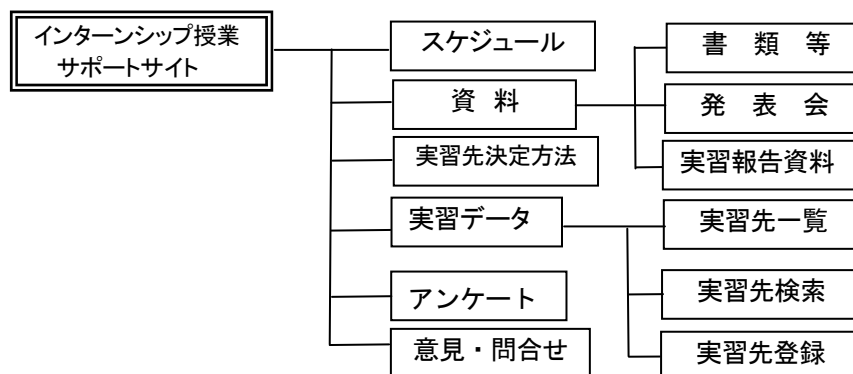
なお、実習先との関係から履修者を制限することがあり、その場合には、GPA 評点等を基準に、履修許可の判定を行うこととしている。

(5)教職員の役割、及びサポート

先に述べたように、本科目を担当する教職員は、助言者、支援者の役割を果たす。実習前であれば、準備活動が円滑に行えるよう、学生の不安を軽減し、作業のサポート、及び日程管理にあたる。こういった 1 人ひとりへのケアが行き届くよう、1 教員が担当する学生数は 10 名前後となっている。他に、教職員間の連携、実習先の紹介・連絡、実習先訪問、実習報告書などの共通教材の作成・改善、成果発表会の企画運営等、複数の教職員の協働により、この科目は成り立っている。

(6)サポートサイト

サポートサイトは次のような構成になっている。



図表 I-10 インターンシップ サポートサイト

履修した学生は、このサイトを活用して、実習授業の進め方を把握し、提出書類を作成することができる。また、過去資料の閲覧もできるようになっている。各自が自主的に計画を立て、事前学習、あるいは事後学習に当たることを容易にするツールである。

(7) 評価方法

成績評価は担当教員が行う。事前・事後授業における出席と授業への参画度、実習期間中における評価、実習報告書や日誌の内容、クラス発表等を総合的に判断して評価する。

2.3 調査報告

(1) 調査目的

本学情報マネジメント学部では、2006 年度より科目独自のフォームを使って、学生による「授業評価」を開始し、現在に至っている。そのうち、定量的調査結果については、毎年本学ホームページの「インターンシップ」サイトに公開し、誰もが閲覧できるようになっている。ねらいは、受講した学生が結果を閲覧して、科目評価の確認を行い、自身の今後の学習計画に活かし、また、必要があれば、教職員と結果について検討を行い、改善策へと導くことが一つ挙げられる。

また、同時に、翌年の受講希望者がこのサイトを閲覧し、科目履修を行うかどうかを判断するための参考資料として活用することが挙げられる。受講した先輩の意見を直接聞くことが難しい学生にとって、アンケートの結果は、よい判断材料となる。その意味では、サイトの資料を媒介に既習者と履修希望者の情報交換が可能となり、科目運営の改善なども継続的に行うことが期待できる。

(2) 調査方法、及び実施結果

「インターンシップⅠ」の授業は、毎年 11 月上旬の合同発表会で終了となるため、授業終了後に、サポートサイトを利用して、独自の授業評価アンケートを実施している。2006～2009 年度においては、履修者全員が回答し、有効回答率は各年 100%である。

2006～2009 年度に実施した調査結果（経年比較）は、次の図表Ⅰ-11 に示される。微増減はあるものの、一部を除き、大きな変化は見られないと言ってよいだろう。特に、実習期間中の体験に関する質問 04～07 については、各年、実習先の企業、事業所の協力を得て、よい成果を上げていることが窺われる。結果、質問 10 の「実習内容に対する満足度」は毎年 8 割を超える学生が「満足であった」と回答している。

質問 01 の実習先選択の優先項目については、例年「業界」「職種」が大半を占めていたが、2009 年度は「実習場所」を選ぶ学生が 35%に及んでいる。これは、単年度に見られる特徴か、新しい傾向か、今後注視する必要があるようだ。履修目的（質問 02）についても、「関心のある業界や職種の実務体験」を希望する学生の割合が 2007 年度をピークに下降し、それに代わり「実社会で働くことを体験したい」という学生の割合が増え、2009 年度には 67.5%

	回答数	33	39	55	40
	年度	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年
Q01 実習先を選ぶ際に最も重視した項目は何ですか。	企業名、事業所名、団体名	0.0%	12.8%	12.7%	12.5%
	業界	21.2%	30.8%	38.2%	15.0%
	職種	42.4%	38.5%	23.6%	22.5%
	実習期間	15.2%	0.0%	9.1%	10.0%
	実習場所	15.2%	17.9%	14.5%	35.0%
	特になし	6.1%	0.0%	1.8%	5.0%
Q02 「インターンシップ」を履修した目的は何ですか。	実社会で働くことを体験したい	57.6%	51.3%	61.8%	67.5%
	関心のある業界、職種の実務を体験したい	15.2%	28.2%	21.8%	10.0%
	専門的な能力や技能を体験したい	0.0%	2.6%	1.8%	0.0%
	就職活動に役立ちそうだから	21.2%	15.4%	5.5%	20.0%
	何となくおもしろそうだから	0.0%	2.6%	1.8%	0.0%
	単位が容易に取得できそうだから	3.0%	0.0%	1.8%	0.0%
	その他	3.0%	0.0%	5.5%	2.5%
Q03 実習内容はどのようなものでしたか。	実習先の業務内容に関する説明や見学	6.1%	15.4%	16.4%	22.5%
	複数の部署の仕事を幅広く体験	12.1%	15.4%	7.3%	5.0%
	特定の部署の仕事を集中的に体験	36.4%	20.5%	12.7%	15.0%
	実習担当者の行う業務の補助的作業	-	12.8%	12.7%	12.5%
	一定の課題を与えられての取り組み	42.4%	25.6%	41.8%	32.5%
	自主的な企画や提案による取り組み	3.0%	2.6%	3.6%	7.5%
	その他	0.0%	7.7%	5.5%	5.0%
Q04 実習期間中は有意義な毎日でしたか？	非常に有意義だった	36.4%	35.9%	36.4%	40.0%
	比較的そうだった	39.4%	48.7%	38.2%	50.0%
	どちらとも言えない	15.2%	5.1%	12.7%	2.5%
	あまりそうではなかった	9.1%	10.3%	10.9%	7.5%
	そうではなかった	0.0%	0.0%	1.8%	0.0%
Q05 職場の人たちは親身な指導をしてくれましたか。	非常に親身な指導をしてくれた	63.6%	69.2%	63.6%	62.5%
	比較的そうだった	27.3%	23.1%	21.8%	30.0%
	どちらとも言えない	6.1%	5.1%	7.3%	7.5%
	あまりそうではなかった	3.0%	2.6%	7.3%	0.0%
	そうではなかった	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
Q06 職場の人たちとは十分なコミュニケーションがとれましたか。	十分なコミュニケーションがとれた	27.3%	28.2%	30.9%	37.5%
	比較的できた	48.5%	59.0%	43.6%	40.0%
	どちらとも言えない	15.2%	10.3%	7.3%	15.0%
	あまりできなかった	9.1%	2.6%	14.5%	7.5%
	ほとんどとれなかった	0.0%	0.0%	3.6%	0.0%
Q07 実習内容はアルバイトと異なっていましたか。	異なっていた	72.7%	76.9%	85.5%	87.5%
	どちらとも言えない	24.2%	15.4%	12.7%	7.5%
	変わりはない	3.0%	7.7%	1.8%	5.0%
Q08 今後の学習に役立つ成果が得られましたか。	非常に大きな成果が得られた	36.4%	43.6%	41.8%	37.5%
	比較的得られた	51.5%	41.0%	41.8%	52.5%
	どちらとも言えない	9.1%	10.3%	14.5%	7.5%
	あまり得られなかった	3.0%	5.1%	1.8%	2.5%
	ほとんど得られなかった	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
Q09 今後のキャリア設計に役立つ知識が得られましたか。	非常に役立つ知識が得られた	24.2%	35.9%	32.7%	32.5%
	比較的得られた	45.5%	38.5%	43.6%	52.5%
	どちらとも言えない	18.2%	23.1%	23.6%	15.0%
	あまり得られなかった	12.1%	2.6%	0.0%	0.0%
	ほとんど得られなかった	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
Q10 今回の実習内容には満足していますか。	非常に満足している	30.3%	46.2%	32.7%	40.0%
	比較的満足している	54.5%	33.3%	47.3%	45.0%
	どちらとも言えない	9.1%	10.3%	5.5%	7.5%
	あまり満足していない	3.0%	10.3%	14.5%	5.0%
	満足していない	3.0%	0.0%	0.0%	2.5%
Q11 実習前の事前授業は実習に役立ちましたか。	非常に役に立つ	39.4%	15.4%	7.3%	10.0%
	比較的役に立った	45.5%	38.5%	50.9%	32.5%
	どちらとも言えない	9.1%	20.5%	21.8%	35.0%
	あまり役に立たなかった	6.1%	25.6%	16.4%	17.5%
	役に立たなかった	0.0%	0.0%	3.6%	5.0%
Q12 今回の実習先は後輩に推薦できる実習先です	強く推薦できる	54.5%	28.2%	30.9%	40.0%
	推薦できる	39.4%	46.2%	45.5%	45.0%
	どちらとも言えない	6.1%	12.8%	5.5%	7.5%
	さほど推薦できない	0.0%	10.3%	12.7%	7.5%
	推薦できない	0.0%	2.6%	5.5%	0.0%
Q13 「インターンシップ」は後輩に履修を薦める科目ですか。	強く薦める	54.5%	59.0%	56.4%	55.0%
	薦める	39.4%	23.1%	40.0%	42.5%
	どちらとも言えない	6.1%	15.4%	3.6%	2.5%
	薦めない	0.0%	2.5%	0.0%	0.0%

図表 I-11 事後授業でのアンケート結果（2006 年度～2009 年度）

に達している。厳しい雇用環境を反映してか、業界を絞り込まずに幅広い見識と経験を得ることが重要だと感じている学生が増えたことを示唆しているともみられよう。「実習内容」については、毎年「一定の課題を与えられての取り組み」の割合が最も高いが、「実習先の業務内容に関する説明や見学」の割合が年々増え、2009 年度には 2 割を超えたことが一つの変化としてとらえることができる。

実習を通して、「今後の学習に役立つ成果が得られたか」（質問 08）については、例年 8 割以上の学生が「成果が得られた」と回答し、2009 年度は 90%に達している。また、質問 09 の「今後のキャリア設計に役立つ知識が得られたか」についても、年々「得られた」と回答する学生の割合が増え、2009 年度は 85%に上っている。厳しい雇用環境におかれる昨今、学生のキャリアに対する関心は年々高まっており、「早期に実社会での実務体験を得ることは自らのキャリア形成に有益な指針を与える」との認識を持つ学生が増えることは好ましい変化とも言えよう。「後輩に自分の実習先を推薦するか（質問 12）」、「科目履修を薦めるか（質問 13）」についても「薦める」と回答した割合が各年とも 8 割前後に達している。

他方、質問 11 の「事前授業は役に立ったか」については、2006 年度に 8 割を超える学生が「非常に役立った」または「役に立った」と回答しているのに比して、年々下降傾向にあり、2009 年度は 42.5%に止まった。これについては、精査が必要であることは言うまでもないが、冒頭でも挙げたように、この科目の事前・事後の学習は極めて意義深く、「実習」で得られる貴重な体験を核に豊かな学習を展開することができる機会になる。単に、「実習体験＝インターンシップの授業」と誤認識することは、学びの効果を半減させてしまうことになるだろう。今後は、事後授業の有用性についても調査し、検討することが必要である。

(3)まとめ

これまで見てきたように、本科目は、本学が開学以来、受入企業・機関の協力を得て、学生に実社会での実習体験を提供するため、学生のニーズに応えながら今に至っている。本節では、科目の特徴、概要に加え、情報マネジメント学部で実施したアンケート調査の実施結果を報告した²。

この調査結果からは、「インターンシップⅠ」が学生にとって、意義深い学習機会であることが窺える。特に、学生が授業の一環として主体的に取り組んだ実習経験がその後の学習やキャリア設計に役立ったという有用感、彼らの大学生活と卒業後の社会生活を接続する上でも有効であるといえる。今後は、学生のニーズを満たす実習内容の充実化に加え、事前・事後授業がいかに有益な学習につながるか学生に伝える方略を検討する必要があることが調査結果から得られた課題である。今後も調査を継続し、改善に活かしたい。

² 本報告は、資料作成も含め、小柴達美、見竹三樹夫両氏に依るところが大きい。この場を借りて深甚感謝申し上げたい。

Ⅱ. 授業評価・受講態度調査報告

1. 学生による授業評価の結果報告

「学生による授業評価」は今回で 16 回目を迎え、多くの授業に有益な情報を提供している。さらに、授業評価結果が教員の自主的なFD活動へと展開され、着実な効果が得られている。本稿では、2009 年度の「学生による授業評価」の実施結果の一部を概略的にまとめる。

1.1 2009 年度実施結果

本学の授業評価項目は多岐にわたる内容で構成されているが、その中でも特徴的な実施結果を中心に説明する。授業改善活動の推移を示すため、2002 年度から 2009 年度までの集計結果を表示したい。また、前学期と後学期の回答結果では、異なった特性を有することもあるため、データは、一方の学期のみの比較になっている。

(1)実施概要

本学の「学生による授業評価」は、原則として全科目を対象に、共通の質問項目で実施している。また、体育実技の様に教室内で授業が行われない科目、毎回違った講師を招聘するチェンレクチャー方式を採用した授業科目等、教員が特定できない場合は、自由記述のアンケートのみを実施している。さらに、「インターンシップⅠ」や日本語科目など、授業科目の性格上、共通の質問項目を設定できない場合には、例外として独自の質問項目のアンケートを実施し、次回以降の授業運営の参考としている。

2009 年度の授業評価の対象科目数は図表Ⅱ-1 の通りである。対象科目の 9 割程度が共通の質問項目による授業評価を実施しており、全学的な取り組みとして実現している結果と言うことができる。

	実施対象	集計対象	自由記述のみ
前学期	3 7 1	3 3 8	3 3
後学期	3 5 9	3 1 9	4 0

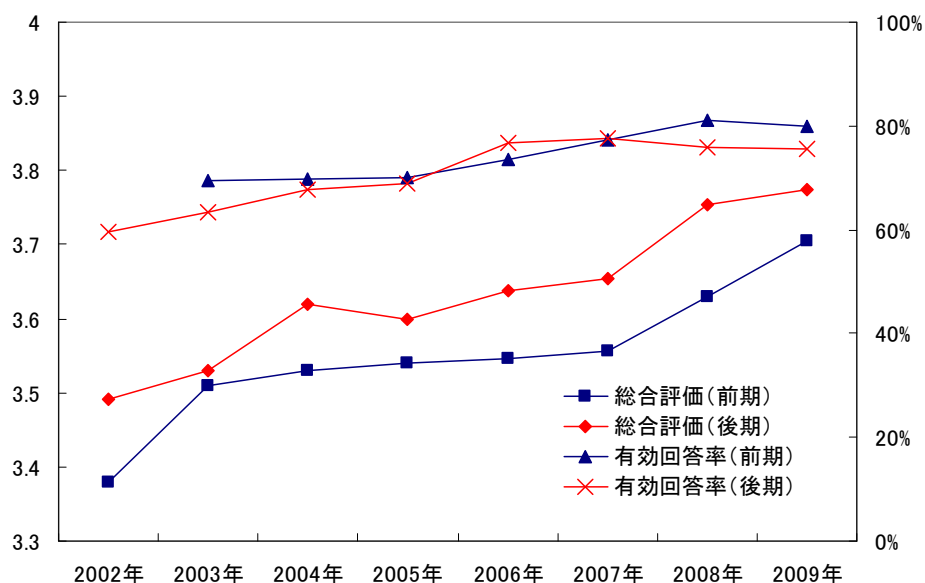
図表Ⅱ-1 2009 年度の実施結果

(2)総合評価と有効回答率

2002 年度から本年度までの総合評価のポイントと有効回答率の推移を示したものが、図表Ⅱ-2 である。まず、総合評価に関しては、その評価ポイントは着実に上昇しており、授業の質的向上が図られていると理解することができる。特に今年度、後学期の伸びは若干鈍ったものも、前学期ではさらに上昇している。総合評価では、最高値を 5 ポイントとして数値化していることから、全科目の平均値から判断とすると、概ね良い授業を実現できたと言えよう。

有効回答率に関しては、後学期の結果は横ばい傾向ではあるが、75%以上の回答率が得られている。これには、授業に対する高い出席率や授業評価への参画意識の向上がその理由と

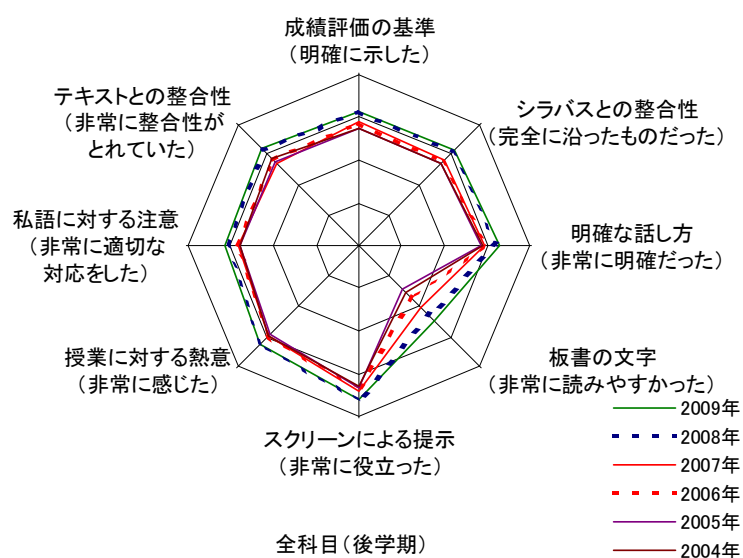
して考えられる。なお、有効回答率は、履修者に対する回答者の比率を示しており、履修者以外の回答、学生番号が特定できないものは除外している。



図表Ⅱ-2 総合評価と有効回答率の推移

(3)授業内容

図表Ⅱ-3に示すレーダチャートは、後学期の授業内容を示す8項目の集計値であり、各学期ごとに全科目の平均値をまとめ、経年の推移を示している。ここでの最大の特徴は、この質問が開始された2004年度よりも、本年度の評価値は年々外側へふくらみ、すなわち、評価結果が高くなっていることである。これは、総合評価の指標と同様に、授業改善活動の成果と読み取ることができよう。

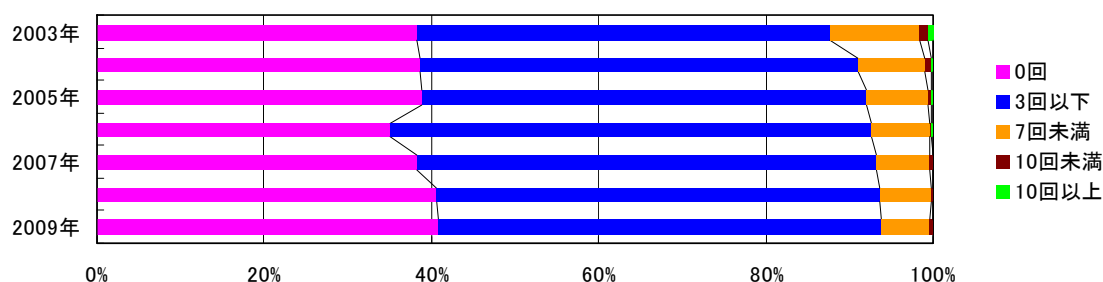


図表Ⅱ-3 授業内容の評価結果

また、「板書の文字」に関しても、年々評価値は向上しており、担当教員の努力によって提示した文字が読みやすくなった結果が推測できる。さらに、「板書の文字」以外の評価項目に関してもほぼ同レベルの高い評価値を示しており、この結果からも授業改善活動の成果が得られていることが判る。なお、評価結果のレーダチャートは、前学期と後学期を比較すると、明確な相違点は認められない。

(4)学生の出席状況

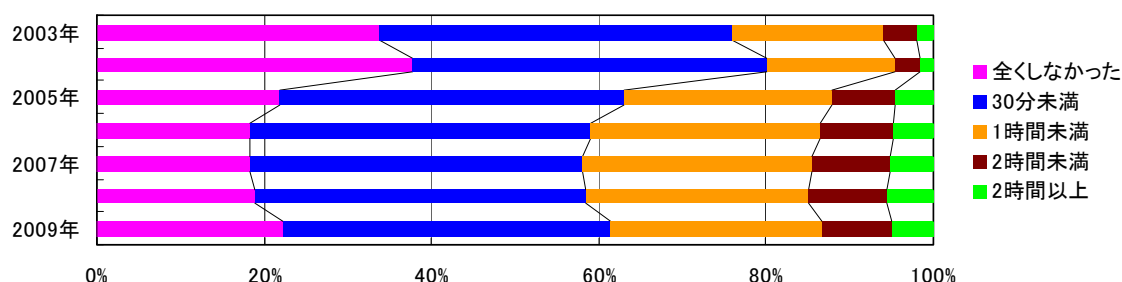
授業への出席状況に関しては、年々増加傾向にあり、2009 年度後学期には、約 95%の学生が「欠席が 3 回以下」との回答結果を得ている。該当科目の単位取得者を集計対象としているが、単位取得のためには、授業への出席が前提になることが学生に浸透している結果といえる。逆に、7 回以上の欠席（「欠席が 10 回未満」と「欠席が 10 回以上」の合計）は非常に少ない。



図表Ⅱ-4 授業の出席状況 (欠席回数)

(5)学生の勉強時間

図表Ⅱ-5は、該当科目の単位取得のための1週間当たりの学習時間の推移である。本年度後学期に関しては依然として60%近い学生が30分未満の低い水準である。この回答結果には、演習系科目の授業も含まれるため、大半の学生については、自主的な予習、復習がなされていないことが推測できる。

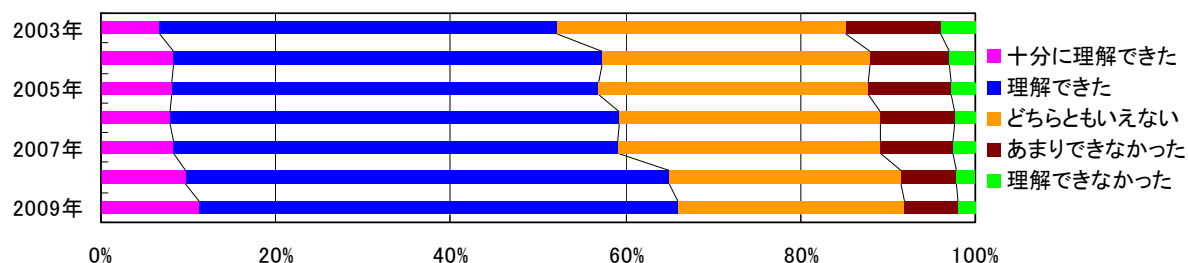


図表Ⅱ-5 学習時間

(6)授業の理解度

授業に対する学生の理解度は、「十分に理解できた」「理解できた」を合わせた比率が年々増加し、本年度は60%を超える数字となっている。教員の授業運営方法の向上がその主たる

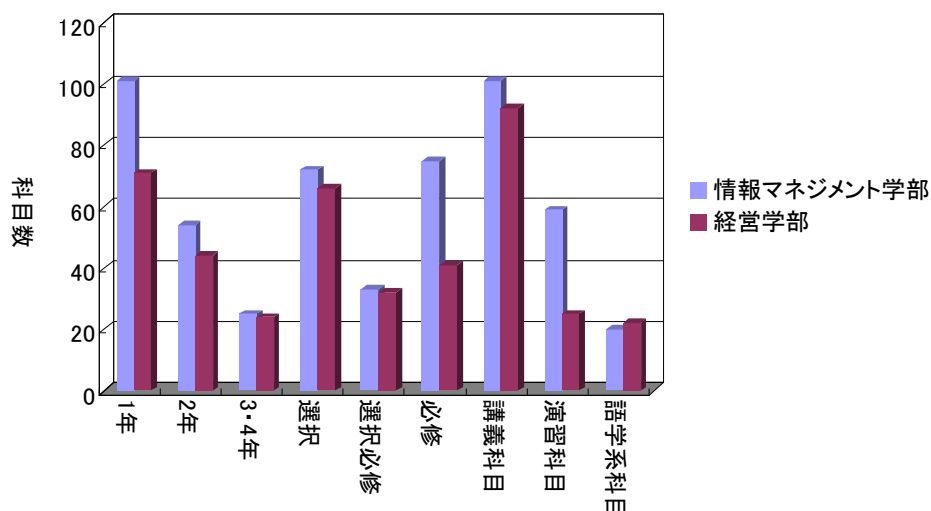
理由であることが推測でき、改善努力の現れでもある。しかし、学生の学習時間が伸びていないことから、学生の自主的努力による理解度向上は当てはまらないであろう。さらに、欠席回数が減少していることなども合わせて推測すると、「予習、復習なしで授業に出席し、その場で授業内容を理解したと誤認識している」可能性もある。



図表Ⅱ-6 学生の理解度

(7)学部間の相違点

両学部での科目特性に基づく後学期の科目構成数は図表Ⅱ-7の通りである。大きな特徴として、情報マネジメント学部では「1年次配当科目」「必修科目」「演習科目」の科目配当数が経営学部 비해、高いことが判る。カリキュラム特性に合わせたクラス編成が、その主たる理由であると考えられる。

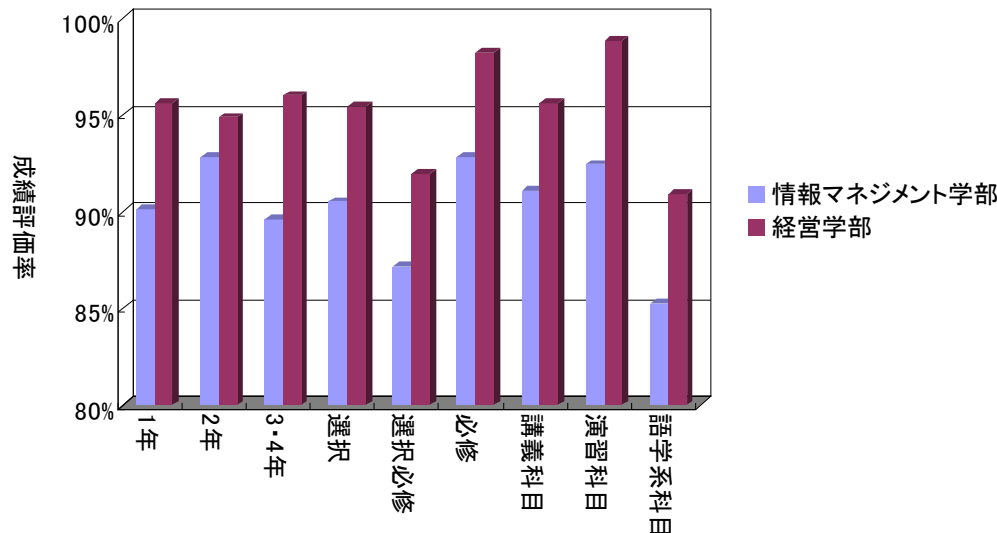


図表Ⅱ-7 後学期の科目特性ごとの配当科目数

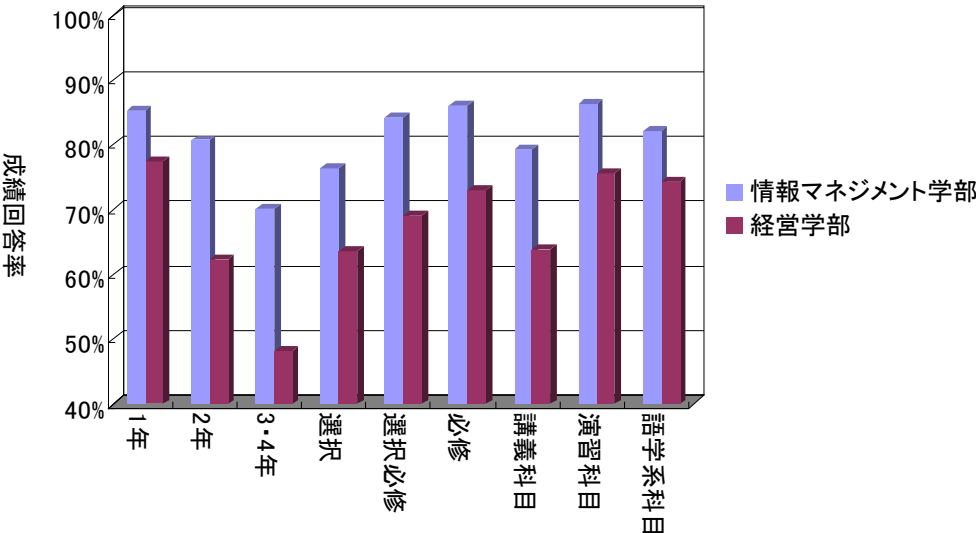
図表Ⅱ-8、図表Ⅱ-9に示す科目特性ごとの指標では、両学部では異なった結果を示している。ここで、「成績評価率」とは、全履修者数に対しての成績評価がされた履修者の比率である。また「成績回答率」とは、成績が評価された履修者数に対する授業評価アンケートの有効回答数の比率である。

図表Ⅱ-8の「成績評価率」では、経営学部は全ての科目特性において成績評価率が高いことが判る。別の見方をすれば、途中の授業辞退者が少ないことが読み取れる。

図表Ⅱ-9の「成績回答率」に関しては、情報マネジメント学部の方が比率が高いことが特徴である。成績が評価された学生は、最終時の授業評価において正確に回答している結果と考えることができる。

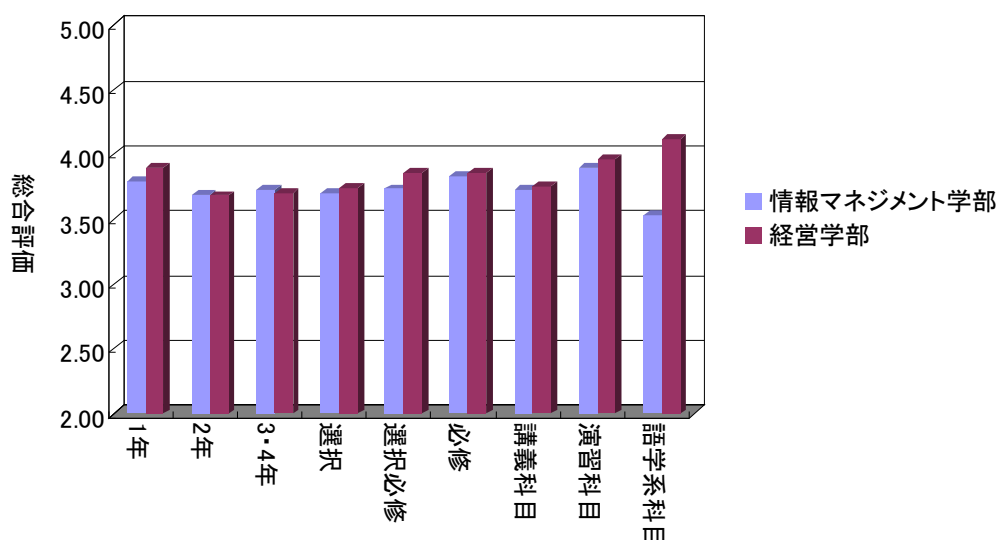


図表Ⅱ-8 後学期の科目特性ごとの成績評価率



図表Ⅱ-9 後学期の科目特性ごとの成績回答率

科目特性別に総合評価を示したものが、図表Ⅱ-10 である。総合評価については、両学部間で語学系科目を除いて大きな差は認められない。



図表Ⅱ-10 後学期の科目特性ごとの総合評価

	前期		後期	
	有効回答率	総合評価	有効回答率	総合評価
情報マネジメント学部	83.3%	3.68	81.8%	3.75
経営学部	76.3%	3.74	67.7%	3.80

図表Ⅱ-11 学部別の有効回答率と総合評価

図表Ⅱ-11 には、学部別の有効回答率と総合評価の平均値を示している。ここでの特徴として、「総合評価のポイントは経営学部が高く」「有効回答率は情報マネジメント学部が高い」ことが特徴である。これは、前学期、後学期ともに認められる傾向である。こうした傾向には、様々な要因が影響していると考えられるが、一義的に推測することはできない。1つには、両学部における授業科目特性の構成比の違いが、作用していることが要因として挙げられる。

Ⅲ. 授業改善・FD活動の報告

1. 授業改善の取り組み

報告者：伊藤 泰雅（情報マネジメント学部准教授）

1.1 情報リテラシー科目の授業改善に向けた情報共有の取り組み

「情報リテラシーI・II」は、新1年生のリテラシー能力を養成する重要な科目である。学内環境 SIGN の理解、Windows とオフィスソフト操作の習得を目的として実施されている。9 クラスで同じ運営ルール、同じ教材で実施する。パソコン環境の更新などにより、ほぼ毎年教材やパソコン環境が新しくなるため、授業上のトラブルの原因を事前につかむことが難しい。このためクラス間で情報共有することが重要で、専用の掲示板サイトを開設し、運用した。今回は、担当教員が情報共有の掲示板サイトに書き込み、交換した情報（記事）を整理して報告する。

(1) 情報共有の掲示板サイト

この科目では、様々な授業改善の取り組みを行ってきた。2008 年度は、学期前後の担当教員打合せ、教員相互の授業参観、メーリングリストによる情報共有などを実施した。授業期間中は様々なトラブルが発生するが、そのトラブルの情報を隠さずに他の教員に伝えることで、後に授業を実施する教員の負担が軽減され、授業運営がスムーズになるという効果を生んでいた。情報共有のツールとしてメーリングリストを利用していたが、学期内で 200 通ほどのメールが飛び交う状況で、管理に不便さがあった。この改善として 2009 年度は、情報共有のための掲示板サイトを研究ネットワーク上に開設した。

2009 年度の掲示板サイトに投稿された記事を分類すると、図表Ⅲ-1 のようになる。テーマごとのスレッドの立ち上げは主務者が行い、各スレッドには担当教員が自由に書き込みを行った。また掲示板に書き込みを行うと、担当教員のメーリングリストにメールで通知される機能を実現して運用した。これにより書き込みの状況を担当教員に即座に通知した。

項目	内容	スレッド数	総記事数
事前連絡	翌週の授業内容、携帯パソコンの不具合情報、主務者からの連絡事項、など	2	32
授業報告	担当教員による授業報告、授業上の重要な案内、出席・欠席者の情報、など	13	146
学内環境	携帯パソコンやソフトウェアに関する情報、情報サービスセンターからの案内、など	3	26
その他	主務者への質問、授業改善の議論、など	3	8

図表Ⅲ-1 掲示板の記事項目と投稿数（2009 年度）

詳細な報告を掲示板に書き込むことは、担当教員にとって負担である。しかしこの取組みが各クラスの授業改善につながることを理解した上で、全ての担当教員が掲示板サイトを利用した。

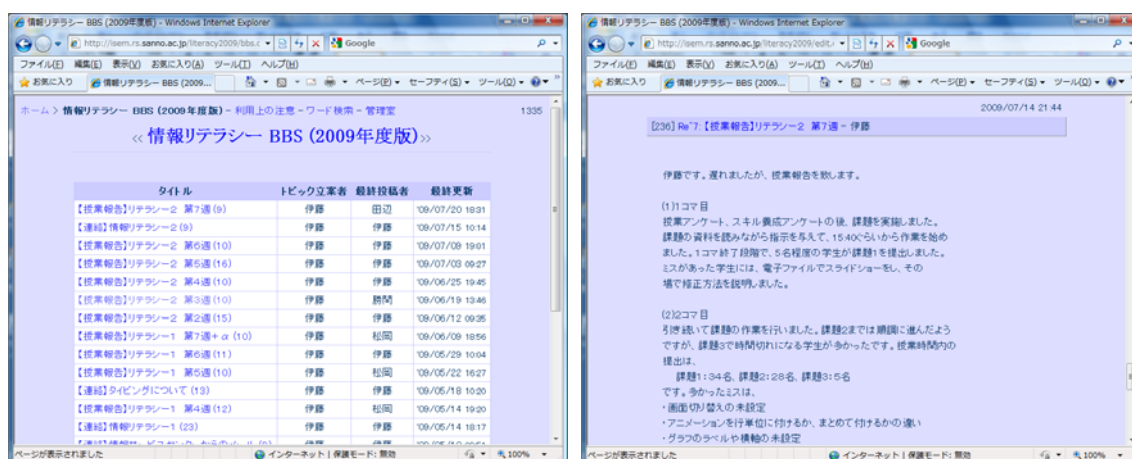
(2) 実施成果

掲示板で交換した情報で、授業実施上、特に有益であったものは、「授業内容に対する学生の反応、学生がつまずきやすい所（操作で難しい所）、学生が課題を行うスピード（授業の進行時間）、出席・欠席の人数、持ち込み携帯パソコン（非あっせん機）特有のトラブルと対応方法、テキストや資料通りに携帯パソコンが動作しないケース（誤動作やフリーズ）、授業項目の効果的な実施方法（提案）」などである。

学生がつまずきや、想定していないパソコンのトラブルは、スムーズな授業進行を妨げる。2009年度は、携帯パソコンの事前設定に関する不備が多く、授業内でパッチ作業を行うことがあった。持ち込みパソコン（非あっせん機）も多く、個別の対応に教員も苦勞をした。既に授業を実施している教員から、掲示板サイトを通して連絡を受けることで、トラブルに備えて授業に臨むことができた。必要な情報がスレッド（記事）の形でまとめられているため、情報にアクセスしやすく、メーリングリストでの情報共有よりも、利便性が向上した。特に、1つの案件に関して複数の教員が意見を述べる際に、スレッドでまとめられていることが議論を便利にした。

(3) 課題

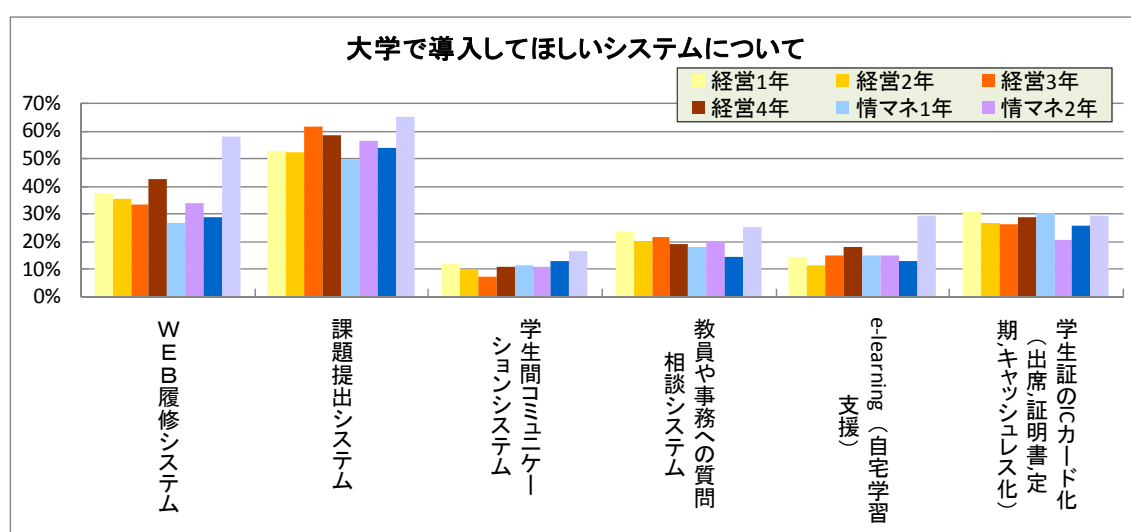
2009年度は週周りが先に進む曜日がほぼ固定され、特定の曜日の教員が負担を被ることが多かった。負担を平等にするためには、年度ごとに教員の担当曜日を変える方法があるが、他科目との兼ね合いであるので、実施が難しい面がある。このような平等な週周りでない場合に、先行する教員が報告を行う負担を、授業改善の視点から評価するしくみが必要である。



図表Ⅲ-2 情報リテラシーBBS（科目掲示板）

1.2 演習科目における課題提出方法の改善と学生の評価

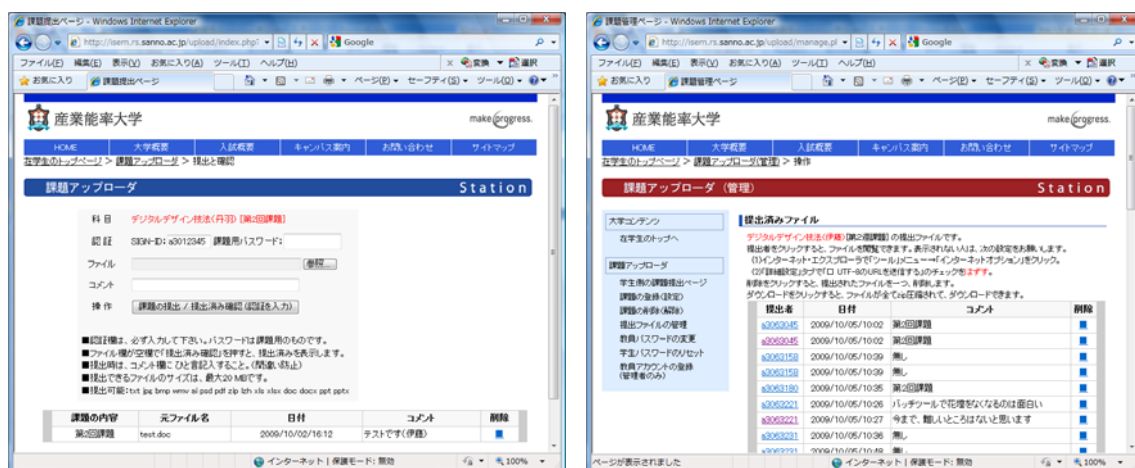
2010 年度に情報センターが実施した学生アンケートの結果では、学生が S I G N 上で実現を望む学内サービスの 1 位は「課題提出システム」である。従来、学内で課題ファイルを電子的に提出する際には、メールとネットワークフォルダで実現していた。しかし、扱えるファイルサイズに制限がある、ログが取れないなどの問題点があり、学生と教員ともに不便な状況であった。このため W e b を利用したファイル提出の仕組みを検討し、新たに課題提出サイトを試作した。そして、2009 年度の担当科目「デジタルデザイン技法」で試験運用し、学生にアンケートを実施した。この課題提出サイトの運用の様子、デジタルデザイン技法で行ったアンケートの結果を報告する。



図表Ⅲ-3 学生アンケートの結果（情報センター）

(1) 課題提出サイトの試作

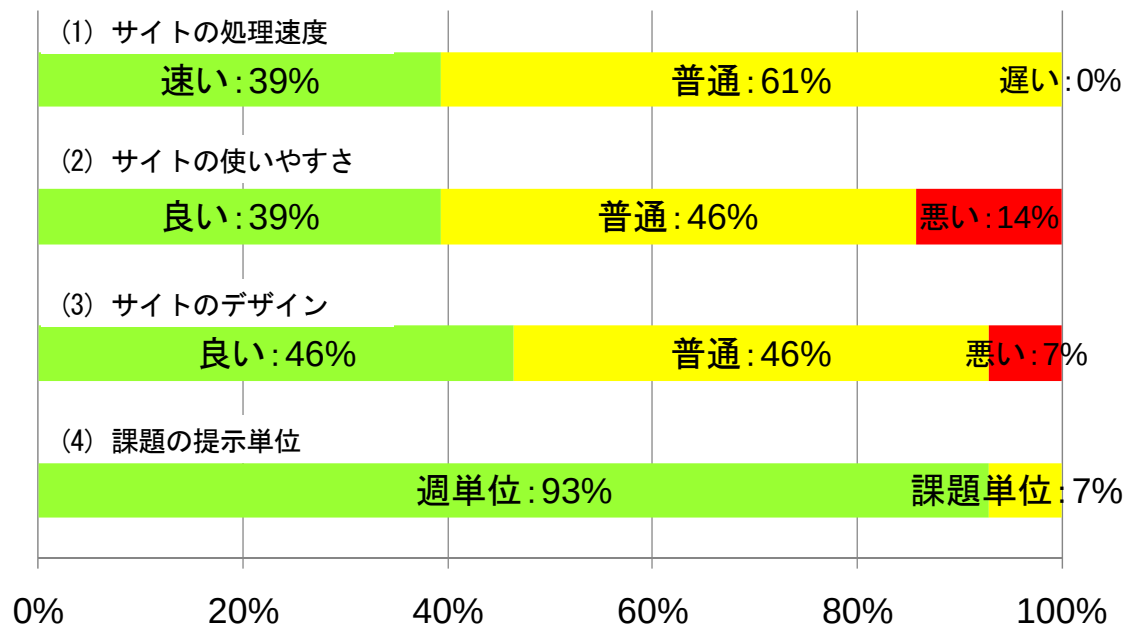
コンテンツ系の科目が増え、ファイル提出を求める課題の提示が増えている。しかし大容量の電子ファイルを提出するしくみが、学内では実現されていないため、従来は、課題ファイルをメールに添付する、ネットワークフォルダに学生がコピーする、などの方法で課題ファイルの提出が実現されてきた。いずれも教員と学生にとって不便であり、特に教員の採点上の手間を必要としていた。このような状況を改善するために、課題提出用の Web サイトを試作した。この課題提出サイトでは、学生は科目と課題を選んでファイルを提出することができる。また提出したファイルを一覧表示で確認することができる。教員は、課題の設定と削除、提出ファイルの一括ダウンロードなどが可能である。提出されたファイルを教員用パソコンに一括ダウンロードする際に、提出物を一覧表示する HTML ファイルを自動的に挿入している。これを用いて、Web ページ上で提出ファイルを順次、閲覧して採点することができる。



図表Ⅲ-4 課題提出サイト

(2) サイトの運用とアンケート結果

2009 年度後期は、「デジタルデザイン技法」（3 クラス）と「コンピュータグラフィックス」（1 クラス）の 2 科目で試験運用した。「デジタルデザイン技法」では、ほぼ毎週、履修学生全員（各クラス 50 名程度）が、授業内に 1MB 程度のファイル数点を提出し、「コンピュータグラフィックス」では、学期内で 2 回、学外からの提出も含めて、全員が提出操作を行った。「デジタルデザイン技法」（伊藤クラス、履修者 45 名）の授業で、簡単なアンケートを実施した。その結果を図表Ⅲ・5 に示す。



図表Ⅲ-5 学生アンケートの結果（横軸は、総回答者数に対する比率）

学生の自由記述では、「提出したファイルの確認が出来て良い」「特に問題は感じない」「一度に複数のファイルが提出できると良い」「リンクのバナーが大学ページ上にあると良い」といった意見が出た。試験運用にご協力頂いた教員（2名）からは、「課題フォルダや、メールよりは使いやすい」「安定に運用されると良い」「今後も使う予定」といった意見を頂いた。アンケート結果を含めて、課題提出サイトは学生に操作の負担を強いるものではなく、教員にとっても採点の利便性が向上するシステムであることを確認した。

(3) 今後の予定

サイトの運用を開始した当初は、研究ネットワーク全体が停止して課題提出サイトが利用できない、教員側でファイルを一括ダウンロードする方法が分からない、といったトラブルがあった。これは今後、SIGN 上にサーバを移設し、マニュアルを整備することで対応する。

2010 年度は課題提出サイトを利用する科目を増やし、大規模な運用に必要な機能を検証する。学内での本運用を早々に実現するべく、整備をしていく。

2. FD活動の報告

2.1 学内FD研修会

2009年度は、定例の教授会終了後に湘南キャンパスで行われる「両学部ミーティング」の時間を利用し、本学専任教員および関係職員を対象として4回のFD研修会を開催した。これらの研修会において、ICTを活用した参画型授業の実践や他大学での先進的な取り組みに関する貴重な知見を得ることができた。

以下に、各研修会の発表要旨をまとめる。

(1) 第1回FD研修会（2009年5月27日開催）

学生教育のための統合基幹業務システムの開発

（岩田安雄、松村有二、斎藤文、長屋信義、坂本祐司・情報マネジメント学部）

3・4年次のコース専門科目「ITコーディネート総合演習」でのERPソフトを活用した実践的な授業についての発表を行った。授業の中で、実際にビジネスの現場で使われているソフトウェアを利用することは学生にとっては敷居が高く、さらに授業運営コストが高額になってしまうため、本授業では簡易版ERPソフトを開発し、授業で活用している。本研修会を通じて「マネジメントの思想と理念をきわめ、これを実践の場に移しうる能力を涵養」という本学の建学の精神に則った授業実践例を教員間で共有することができた。

備考：本発表は、2008年度 本学共同研究の成果の一部である。

クラス	売上高 粗利益率	売上高 原価率	売上高 経常利益率	売上高 在庫維持費率
1	24.3%	75.7%	-3.2%	2.7%
2	26.1%	73.9%	4.7%	1.2%
3	25.7%	74.2%	-2.3%	3.4%
総計	25.4%	74.6%	-1.2%	3.0%

第1回 FD研修会（発表者：岩田教授）

(2) 第2回FD研修会（2009年6月17日開催）

学習用SNSの実用化に関する研究

（長岡健、盛屋邦彦、斎藤文、小野田哲弥・情報マネジメント学部）～

学習用SNSが必要となった背景についての説明の後、今回開発した「グループワーク支援システム（GWE）」と「WEB アンケートシステム」2つのシステムについて、実装機能と授業での活用事例について発表を行った。本研修会を通じ、伝統的な知識の内化だけでない学びのあり方に対する貴重な授業実践事例を共有することができた。

備考：本発表は、2008 年度 本学共同研究の成果の一部である。



第2回 F D研修会（発表者：長岡教授）

(3) 第3回 F D研修会（2009 年 10 月 21 日開催）

ポートフォリオ事始め（古賀暁彦・情報マネジメント学部）

「ポートフォリオ」には、「ティーチング・ポートフォリオ」「ラーニング・ポートフォリオ」「アカデミック・ポートフォリオ」等があるが、本研修では、ティーチング・ポートフォリオを中心に、その歴史、目的、内容等について理解を深めることをねらいとした。

高等教育におけるティーチング・ポートフォリオの導入はカナダが最初とされている。その後 90 年代に米国に浸透していった背景には、高等教育の授業料の高騰により、行政や学生の両親から、支払った授業料に見合う研究・教育効果の説明（アカウントビリティ）が求められていたことが指摘されている。現在、米国では多くの大学でテニユア（終身在職権）審査のための書類として、ティーチング・ポートフォリオの提出が、義務付けられている。



第3回 F D研修会（発表者：古賀准教授）

ティーチング・ポートフォリオは「自らの教育活動について振り返り（自己省察）、自らの言葉で記し、様々なエビデンスによってこれらの記述を裏付けた教育業績に関する記録」と定義される（大学評価・学位授与機構パンフレットより引用）。この作成にあたっては、集中ワークショップに参加し、メンターの助言を受けながら作成するのが一般的である。

ティーチング・ポートフォリオの作成目的は、教員にとっては「自らの教育活動の改善」「評価者へのアピール」等が、また大学組織にとっては、「教育活動の把握・情報の共有」「教員評価の様々な視点」「教育の質保証、アカウンタビリティ」などがあげられている。

我が国においても、大学教員の役割の中で「教育」が重視される中、ティーチング・ポートフォリオに注目が集まり効果が期待されているが、課題も少なくない。同回の発表を担当した古賀准教授は、大学評価・学位授与機構主催のティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップに参加した経験から、「実際に作成する教員の負荷のみならず、作成をサポートするメンターの負荷・手配等について考慮する必要がある」と導入する上での留意点を指摘している。

(4) 第4回FD研修会（2010年1月13日開催）

卒業成長値を高める『10の底力』

（加藤千恵先生・東京女学館大学 国際教養学部教授・GP推進室長）

①研修会の概要

今回の研修会では、東京女学館大学国際教養学部教授・GP推進室長の加藤千恵先生を本学に招聘し、同大学で実施している「卒業成長値を高める『10の底力』」（2008年度学生支援GP選定事業）の取り組みを中心にお話いただいた。このプログラムは、東京女学館大学の少人数教育の特性を生かし、通常の授業において専門的な知識を身につけるだけでなく、学力偏差値とは異なる隠れた能力や社会性を高める「10の底力」を伸ばすことを目的に推進されている（同大学Webページより）。



第4回 FD研修会（発表者：加藤先生）

②「10の底力」プログラムの流れ

「10の底力」とは、学生が卒業までの4年間に身につけるべき能力の中で授業を通じて獲得できるものを、東京女学館大学として厳選し定義したものである。具体的には、

- 1) コミュニケーション能力
- 2) プレゼンテーション能力
- 3) ディスカッション能力
- 4) 国際感覚・多文化理解能力
- 5) 外国語運用能力
- 6) 調査能力
- 7) IT能力
- 8) クリティカル思考
- 9) コンセプチュアルスキル（問題発見・提案・実行力）
- 10) 自己理解能力

となっている。

東京女学館大学では、開講しているすべての授業について、その授業で伸ばすことのできる「10の底力」のうち2つを決め、シラバス上で提示している。学生および教員は最終週の授業で、示されている2つの底力が身についたかどうかを3段階で評価する。そして、各科目での結果を集計したものを個人ごとにレーダーチャート化する。このチャートを元にアドバイザーやキャリアカウンセラーの支援を受けて、学生が次期の学習計画を立案するという流れになっている。

③「10の底力」設定のプロセス

東京女学館大学では、開学の際、「リーダーシップ能力をもち国際的に活躍できる女性の育成」を建学の目的として掲げた。その際具体的な中身として選んだ「リーダーに必要なスキル」のうち、少人数教育の中で伸ばせる項目という観点から今回の「10の底力」を再構成した。

しかし、「女子大でのリーダーシップ育成」については、色々と誤解を受けることが多いという。女子高校生からは、「社長や管理職になりたいわけではないので、リーダーシップは興味ありません」と言われることもあったそうだ。しかし東京女学館大学では、「リーダーシップとは、人と人との関係を豊かに結び合って、より良い社会をつくるために努力できる能力であり、教育によって形成されるもの」と捉え、性別を問わず、組織のメンバーとして働く人にとっては必要となる能力であると説明している。

④導入の苦労

「10の底力」を導入する際は試行錯誤の連続であった。教員からは、「私の科目では2つに絞れない」「◎○△の3段階で重み付けを表現したい」など様々な声があったそうだ。しか

し小規模大学の強みを生かし 20 人の専任教員が一丸となって本制度を理解し、一律の基準で導入・運用までこぎ着けた。

「10 の底力」の導入が成功した背景には、従来東京女学館大学が実践している教育のユニークな特徴がある。9 割の授業が 20 人以下という徹底した少人数の教育の実施や、学生のタイムマネジメント能力向上のため、始業～終了のチャイムを一切鳴らさない、といった実践がベースとなって、自発的な修学プランの作成や教員の指導が可能となっているのである。

⑤研修会を受講しての感想

今回、東京女学館大学の事例をうかがって感銘を受けたのは、取り組みを全学レベルで展開している点である。最近多くの大学で「学生の社会人基礎力養成」に関連した取り組みがなされているが、対象となる学生が「意欲を持った学生達」だけのケースが多い。そもそも「リーダーシップを身につけたい」と自分から申し出る学生は、特に大学で特別な教育プログラムを提供せずとも、授業外の活動の中で培ってくるものである。むしろ問題にしないで

1) その他大勢の普通の学生に対してどう展開するか？

2) 通常の学部教育の中で、サステナブルかつ全教員参加でどう運営していくか？

の 2 点であると考え。そうした高いハードルに対して、東京女学館大学では真っ向から挑戦し、成果を出しつつある点が特筆に値する。

また、GP 関連では、規模が大きく豊富な人材に恵まれた大学の事例が取り上げられる事が多いが、東京女学館大学の場合、教員は 20 人、学生数も 313 人しかいないことを逆手にとり、マンモス大学ではできないきめの細かい指導を実現している。他学の真似ではないオリジナルな取り組み姿勢は、本学にとって今後、範とすべきものであると考える。

2.2 学外FD研修会

教育開発研究所の所員を中心に、FDに関連する様々なシンポジウムや学会に参加し、情報収集に努めた。以下は、参加したセミナー・学会等の一覧である。

日時	セミナー・学会名	場所/主催	内容
(2009 年) 5/9	大学アドミニストレーション研究会	桜美林大学	「大学評価システムの日韓比較」「ハーバードのカリキュラム改革：最新状況の分析」「大学サテライトキャンパスの研究」等。
5/16	教育システム情報学会 「教育・学習支援におけるSNSの利活用」	電気通信大学	「福井県立大学 大学連携SNSの概要と目的」「就職活動の支援を目的としたSNS（北陸先端大）」「SNSを活用した内定者フォロー（Gaiax）」等。
6/6～7	大学教育学会全国大会	首都大学東京	「『教養教育』としてのキャリアデザイン力育成のあり方（大阪市立大学）」「大学教員のパフォーマンス評価（シンポジウム）」等。
7/25	質保証の全体像を探る	国立教育政策研究所	高大接続、学習成果、分野別質保証の検討等、様々な視点から大学の質保証についてのあり方を問うシンポジウム。
8/3	大学評価フォーラム	大学評価・学位授与機構	内部質保証システムの充実を目指したアカデミック・ポートフォリオの活用に関し、海外および国内での先進事例について情報収集。
8/9～11	CIECコンピュータ利用教育協議会 2009 PCカンファレンス	愛媛大学	eラーニングによるリメディアル教育、高等学校教科「情報」履修状況調査に関する調査項目等について情報収集。
8/19～21	教育システム情報学会全国大会	名古屋大学	大学教育におけるICT活用の最新動向について情報収集。
9/19～20	教育工学会全国大会	東京大学	ワークショップ型の授業を大学教育に導入する上での情報を収集。
11/21	IDEセミナー「学習させる大学」	IDE大学協会・桜美林大学	学士課程教育の再構築に向け、学習者が主体的に学ぶ大学のありかたについて、先進する大学の事例の情報収集。
11/23	（公開シンポジウム） 大学教育の分野別質保証に向けて	日本学術会議・朝日新聞社	学士力答申で提言されている「分野別の質保証の枠組み」作成に向け、現状の課題と今後の議論の進展について、主導的機関・識者が意見交換を行った。
(2010 年) 1/9	第4回現代GPフォーラム	青山学院大学	ICTを活用したFD/SDプログラムの推進について情報収集。
3/1	eラーニングを活用した授業運営・教育研究活動の可能性	桜美林大学	学士課程教育におけるMoodleを活用した、授業改善の事例について情報収集。
3/6～7	第15回京都FDフォーラム	大学コンソーシアム京都	地域と連携したFDの推進など「つなぐFD」の展開について情報を収集。
3/9	IDE高等教育フォーラム「学習させる大学」	IDE大学協会・千葉大学・東京大学大学経営政策研究センター	「学習させる大学」をテーマに、大学執行部と教員の役割、昨今の高等教育政策の方向性等について情報収集。

図表Ⅲ-6 学外FD研修会一覧

おわりに

2008 年 4 月に教育開発研究所が誕生し、それに合わせ研究所年報の第一号が発刊された。第一号は、手さぐりの状態で発刊にこぎつけたもので、従来の「FD レポート」の内容を踏襲したものであった。第二号にあたる 2009 年度版では、新たに本学の特色ある教育と評価の章を加えた。建学の精神のもと、マネジメントの実践的教育を行ってきた本学の特色ある教育を紹介し、その教育の成果を報告するものである。

プロジェクト・ベースの学習という言葉に代表されるように、特定のプロジェクトを学生主体に遂行することには、学生の意欲の喚起とともに、学習したものを実際に使うこと、企画から準備、開催、完了まで一連のプロジェクトを通して体験的に学習できる良さがある。多大かつ多様な学習成果が期待できるものである。今回は、経営学部で行われているプロジェクト型の学習の内容や成果が報告されている。

また現在、キャリア教育が多くで大学で重視されるようになってきている。キャリア教育では、自己のキャリアに関して自立的に決定できるように、自己分析により、自分を知ることや、仕事の現実を知ることが教育の柱となる。後者の仕事や会社の実態を知ることには大学での教育に限界があるが、それを補う数少ない方法の一つがインターンシップである。

本学では、開学以来、工場実習を含めた企業での体験教育に長年取り組んできた。本編では、今行われているインターンシップの紹介と、過去 4 年にわたり蓄積されたインターンシップの評価に関するアンケート結果を報告している。

今後も本学の特色ある教育を取り上げ、紹介・報告していく予定である。この年報を是非一読いただき、本学の教育や FD 活動の実態を知っていただくとともに、忌憚のないご意見等賜れば幸いである。

今回の年報において各章の執筆を担当した教員は、以下のとおりである。

I. 本学の特色ある教育とその評価

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. アーティスト・プロモーション | 松尾尚（経営学部）, |
| 2. インターンシップ I | 鬼木和子（情報マネジメント学部） |

II. 授業評価・受講態度調査報告

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 学生による授業評価の結果報告 | 小柴達美（情報マネジメント学部） |
|-------------------|------------------|

III. 授業改善・FD 活動の報告

- | | |
|--------------|------------------|
| 1. 授業改善の取り組み | 伊藤泰雅（情報マネジメント学部） |
| 2. FD 活動の報告 | 古賀暁彦（情報マネジメント学部） |

おわりに

城戸康彰（経営学部）

なお、編集作業は、見竹三樹夫さん（大学事務部教務課）に担当してもらった。最後になるが、忙しい中年報の作成に参加、協力していただいた人たちに謝意を表したい。